

宮本省三(著)

片麻痺を治療する [I] 体幹

評者 安藤 努

医療法人文佑会原病院リハビリテーション科

本書を手にし、数ページに目を通した後、時を忘れ一気に最後まで読んだ。というより読めたというほうが正しい。それは読み進むに連れ私のこれまでの「体幹」に対するモヤモヤとしたものを一気に解体し再編し、そして確信をもたらすマイルストーンとなったからである。

冒頭部「トルソ」で、体幹は静止と動きのアンビバレンスであり、その両価性の謎はゲシュタルトあるいは運動モルフォロジーであると述べ、魅力的なプロローグとして本書の核心部分へ誘う。

いつの頃からか人間の体幹の主たる機能は「支持」であると捉えられるようになり、その運動制御はいかにも暗黙のうちになされ、その様式は粗大な運動として考えられてきた。リハビリテーションにおける体幹の認識もまた同様に支持機能および姿勢の象徴的部位としての治療対象となった。体幹運動は意図をもった運動(行為)を陽の当たる部分だとすれば、その影として意識に上らない神経活動であると解釈され、その結果、体幹はなおざりにされたと著者は訴える。

片麻痺患者の体幹の病理を詳細に検査することはない。また総じて検査方法も少ない。事実、その評価ではおおむね座位や立位時の直立性や反応を問う程度である。四肢の麻痺からの回復では、その自由度を問うものであっても体幹についてその視座はない。その結果、この思考の延長線上に治療訓練も存在すると著者は結び、その解釈を断罪し反省的に振り返る。

ヘフナーとマスタートンによる哺乳類の手の巧緻性と錐体路線維の脊髄における下降度を比較した研究では、手の巧緻性とその下降度合いとは正相関すると述べている。手の器用さは体幹、下肢への錐体路の深度程度に関係するとも解することができる。人間の身体をいったん各部に分けて論じること

自体の整合性はあるが、人間の運動は一瞬足りとも分ち難い、唯一の在り方である。体幹だけが進化の道筋からこぼれ落ち、手が特異的に恩恵を受けているのではない。

本書は認知神経リハビリテーション理論に基づく実践的治療の詳細が図版とともに丁寧に解説されている。また体幹についての評価学、運動学の解説書としても十二分な内容である。

体幹は、実は私たち臨床家にとってこれから探究すべきフロンティアなのだ。そして、私には何よりも著者の片麻痺という病態に対する飽くなき探究と真摯な「まなざし」が体幹の「復権」(リハビリテーション)を高らかに謳い上げるアリアのようにさえある。



B5 変形判・326 頁・2 色刷
定価：本体 5,000 円＋税
協同医書出版社刊，2018 年